



連続歴史講座 墓制 の 考古学



2018年10月27日(土) 13:00～
愛知県埋蔵文化財調査センター2階研修室

焔の送り、石の加護

池本正明
(愛知県埋蔵文化財センター)

キーワード：小石室 屋敷墓 集団墓地 勝地

葬送・墓制は、その背景にある他界観と強く関連している事は言うまでもないだろう。古代・中世は、普遍宗教である仏教が伝来し、基層信仰である神祇信仰と融合する時期となっている。他界観も変容する時期となり、一括りする事は困難となっている。従って、今回は変換点を境界として、これらを時代ごとに概観する。

発掘調査で確認された遺構の中で、墓を定義することは難しい場面も多い。まずは、遺体が埋葬された遺構と、確認できなくても同様の構造となる遺構は墓と理解することができる。次に、特に火葬が普及した段階で鮮明となるのであるが、分骨をどう理解するか。火葬地点は墓なのか否か。また、埋葬を伴わない供養塔をどの様に理解するかなど、不明確な部分も多い。今回はとりあえず、多少の混乱は承知の上で、遺構として残る埋葬地以外に、死者に関わる祭祀の場も墓の範疇に含めておく。



▲岡崎市車塚遺跡 10A 区



▲岡崎市車塚遺跡 11C 区 060SZ

お問い合わせ先



公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24

Tel. 0567-67-4163

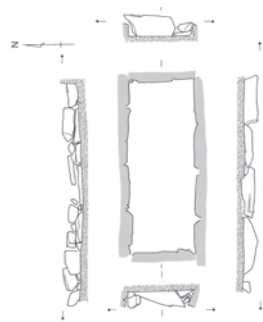
Fax.0567-67-3054

<http://www.maibun.com/top/>

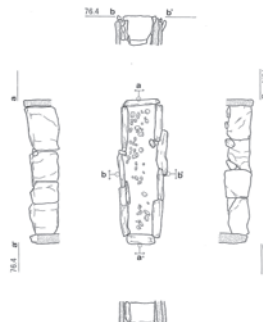


古代の墓は、伝統的な土坑墓の他、まずは古墳の終焉後に登場する小石室が特徴的となる。岡崎市車塚遺跡ではこれが終末期古墳に接する位置に確認され、概ね8世紀初頭を前後する時期とされている。古墳の石室の系譜を引く構造を呈することや、終末期古墳の分布域に重複して存在することから、古墳時代の残影を見ることもできる。一方、小石室とは別系譜の遺構も登場している。火葬後の焼骨を同じ場所に、あるいは別地点に埋納したもので、居住域とは異なる場所でほぼ単独で存在する事が多い。

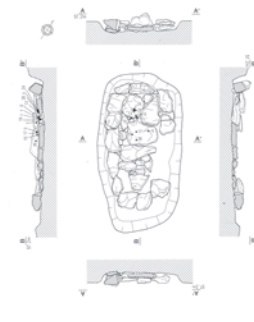
12世紀～13世紀頃には屋敷地内で同時期の土壌墓が確認されることがある。屋敷墓と呼ばれる遺構で、基本的には土葬となる。被葬者はその場所を開発した先祖で、墓に宿る魂が開



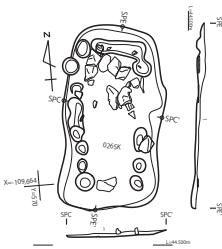
西尾市 高根3号墳



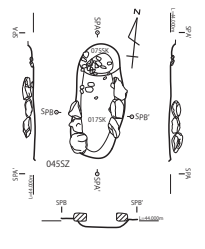
豊田市 岩長遺跡 ST13



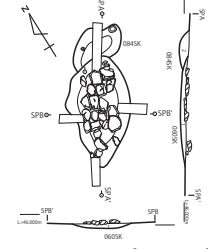
豊田市 南山畑4号墳 (SZ05)



車塚遺跡 10A 区 040SZ

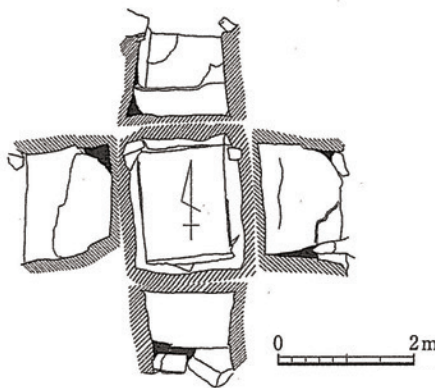


車塚遺跡 10A 区 045SZ



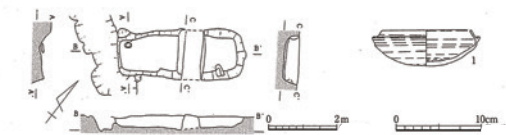
車塚遺跡 11C 区 060SZ

▲ 小石室集成 (矢作川水系)

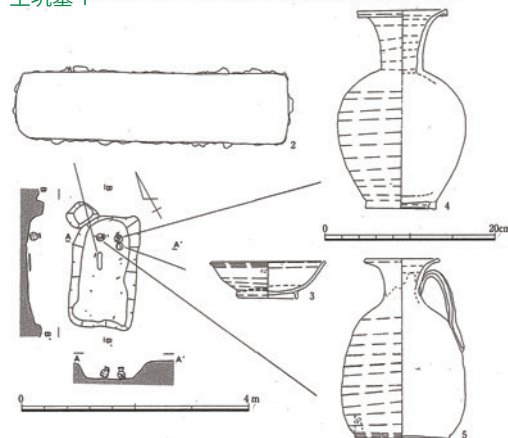


▲ 春日井市大久手古墳

小牧市古天王遺跡 ▶



土坑墓 1



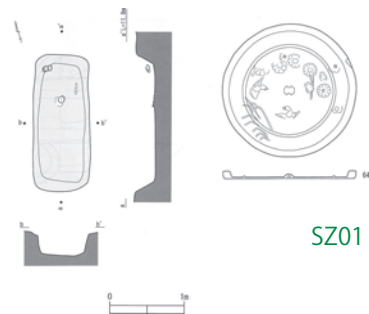
土坑墓 2

発地を守護すると考えられた、とする意見もある。県内では、春日井市松河戸遺跡や西尾市若宮西遺跡などで12世紀中葉～13世紀前葉を中心に散見され、副葬品の内容（主に、山茶碗・小皿、まれに刀や鏡）から、被葬者は中・小領主層が想定されている。一方、この段階には各地で集団墓地が登場する。蔵骨器を主体部とする火葬の方形集石墓群（一部に土葬墓もあり）で、屋敷墓とは別系譜となる。主に集落から隔絶した場所に存在し、一部に経塚造営を契機として成立する状況も報告されている。山岳寺院の周囲に展開する事例も多く、これらの経済基盤として計画的に設定されたとも理解できる。

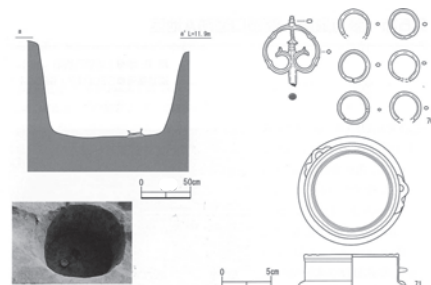


SZ168

▲ 春日井市松河戸遺跡

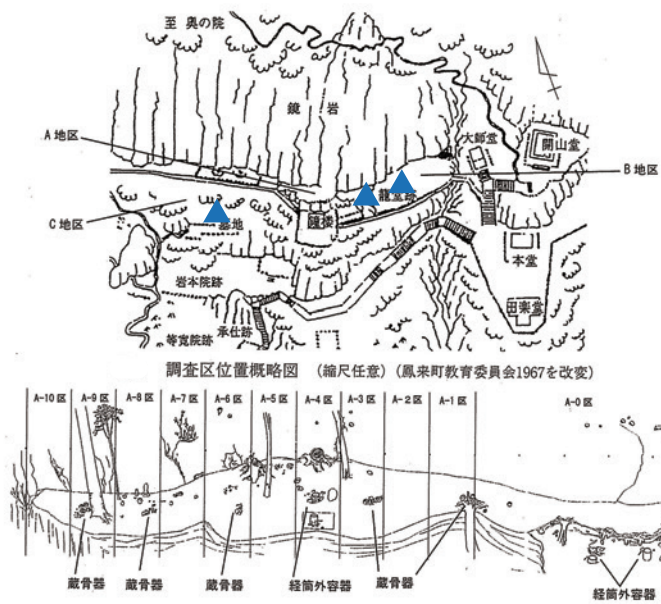


SZ01

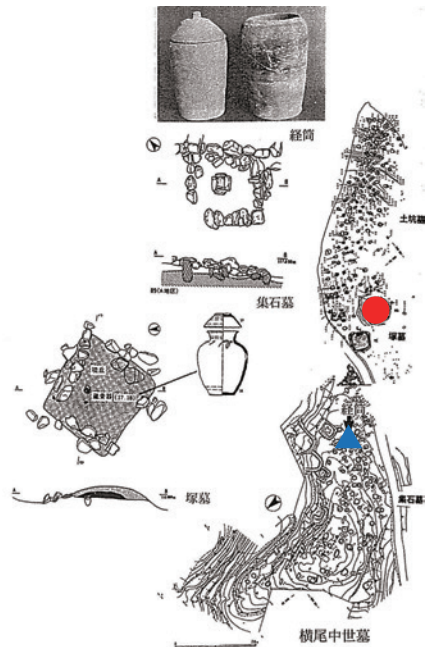


SZ03

▲ 知立市小針遺跡



▲ 新城市鳳来寺



▲ 三重県松阪市横尾墳墓群

「満願寺仏前たるの上、如法経数部奉納の地たり、諸人幽霊の墓所なり (鎌倉遺文 11,328)」



▲ 一宮市法圓寺中世墓



▲ 東海市業平塚



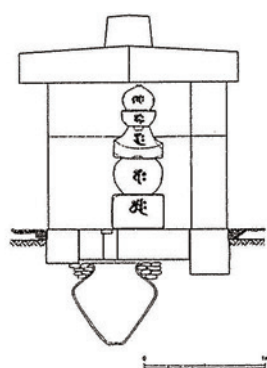
▲▼ 東海市得運寺



「右、当寺は弥陀安置の道場、念仏勸業の霊砌なり、よって近隣の諸人等、寺中の勝地を葬れんの墓所とす (鎌倉遺文 15,328)」

集団墓地などに特徴的に現れる遺物に、宝篋印塔や五輪塔などの石塔がある。県内では集団墓地の出現よりやや遅れて登場する様で、尾張では13世紀後葉頃から花崗岩製五輪塔が、宝篋印塔は砂岩製が14世紀中葉頃に登場し、これが14世紀後葉に一般化している。三河では13・14世紀の資料は散見できるのみだが、15世紀以降にこれが一般化し、花崗岩製もしくは砂岩製の石塔が主体となっている。

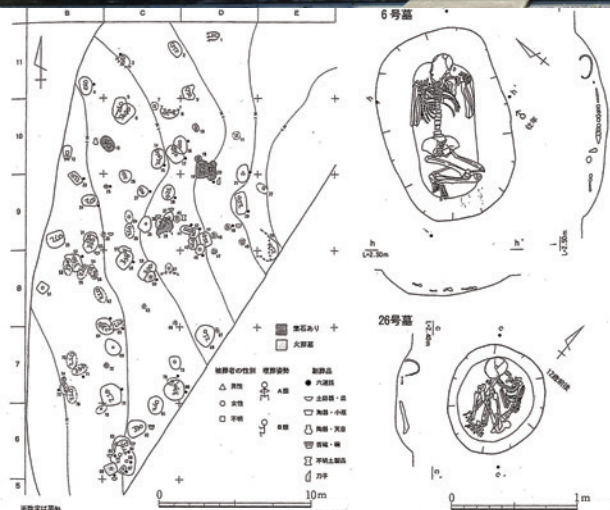
一宮市法圓寺中世墓では、13世紀前葉より造墓が確認されているが、当初は石塔を持たない集石墓であったものが、13世紀末から14世紀前葉に石塔が加わり、やがて区画が省略された石塔墓への変遷が想定されている。なお、こうした様子は、集団墓地の一般的な動向として説明され、石塔下に少量の火葬骨を埋葬する方式や、納骨堂に火葬骨を納める方式と連動する動きと理解されている。



▲長野県飯田市文永寺



▲▼静岡県藤枝市鬼岩寺



◀豊橋市杵嶋神社中世墓

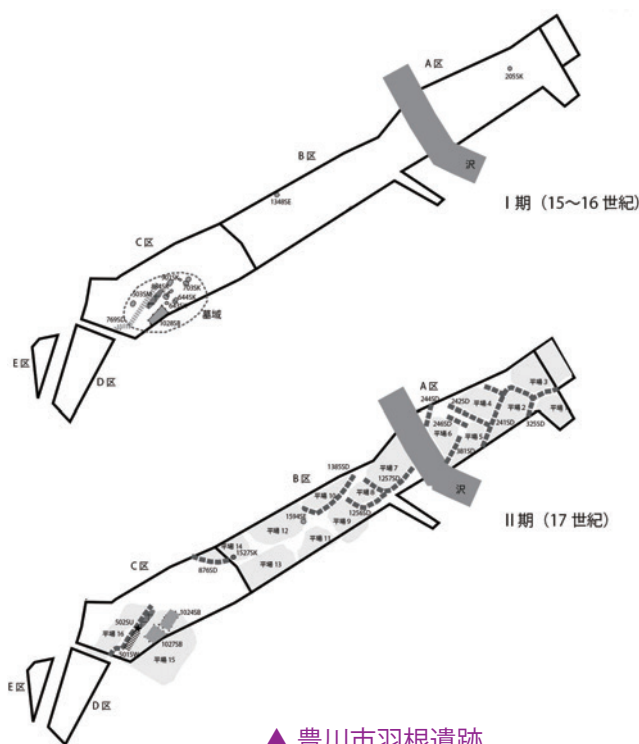
▼高野山奥の院



これらの集団墓地は、多くが今日までは継続せず、遺跡として知られるのみとなっている。これらが消滅する理由は、中世末期～近世初頭に寺檀制度の徹底が図られ、寺院境内墓地に吸収されるなどの再編成が実施されたためとも言われている。

整地を受けた集団墓地として、豊川市羽根遺跡が知られている。石垣（501SW）と集積遺構（502SU）に石塔が集中し、16世紀末～17世紀前半頃に廃止された墓地が存在していたと考えられる。類例として、稲沢市下津宿遺跡では15世紀第2四半期に埋められたとされる石塔の部材が出土した井戸（10Ec区0900SE）も知られている。

一方、15・16世紀には六道銭が副葬される火葬墓や土葬墓が出現し、これらが近世へと継続する可能性が指摘されている。豊橋市市杵嶋神社中世墓遺跡は、30基を超える土坑墓から、渡来銭と寛永通宝などの六道銭が出土し、その好例として重要となる。



▲ 豊川市羽根遺跡



▲ 下津宿遺跡出土石塔



▲▼ 羽根遺跡石塔出土状況

